

本書の著者は10年間ライターとして10代の少年少女に取材を続けてきた今一生氏だ。かつて「プチ家出」という流行語を世に送り出した人物である。「完全家出マニュアル」「大人の知らない子どもたち」といった一見刺激的なタイトルの本を書き続けているが、その内容からは現代に生きる子どもたちの思いを真摯に受け止めようとする今氏の情熱が伝わってくる。本書も子どもたちに寄り添うという点で同様ではあるが、取材で得た生の声をエピソードとして綴ることで、彼らが抱える現代の生きづらさを鮮明に映し出している。また、彼らが生きづらさを感じる原因について、周りにいる家族や友人、教師等との関係にその問題点を見出し、辛辣に指摘している。同時に一人の大人としてどのような考え方や振る舞いをしていくことが問題解決につながるのか提言している点も本書の魅力の一つだ。

いわゆる児童理解・生徒指導に関する本の多くは、教師や大人の視点から語られるものが多いのではないだろうか。付け加えると、先行理論と子どもたちの行為の関連性を調べて、一つの解釈を見出していくという手法が多くを占めているような気がする。もちろんこういった考え方を否定しているのではない。ただ、読み手が間違えた捉え方をすると、技術中心の指導や関わり方に走っていくことも否めないのではないだろうか。授業に置き換えるならば、学習者の実態を見ずに指導論や教材論のみを掘り下げていく営みに似ている。同じく本書を授業に置き換えるならば、学習者の実態を細かく分析した上で、それに見合った指導論や教材論を進めるという姿勢だ。現代を生きる子どもたちを行動や様子、思いといった様々な面から分析した上で、一人の大人としてどのように彼らに関わっていくのかを考える、一連の思考そのものの重要性も著者は伝えようとしているのかも知れない。子どもたちを取り巻く環境や生育過程は様々であり、彼らが何に心を痛め、何に感動し、何に癒されるのかといったことも個人差があり、思いを探ることは困難を極める。顔を背けず文字通り子どもたちに向き合い、思いや背景を探っていく著者の姿勢は並大抵の大人が真似できることではない。また、探ることで得た現代の子どもたちの実態については、大人達の子供の予想の範疇を超えるものであろう。

私自身も本書に書かれているエピソードを読み、その内容に衝撃を受けた大人の一人である。家出をしている17歳の少女は家出の理由について、「私はギャルのかっこがしたい。でも、やるとお母さんがお父さんに『お前の教育がなってないからだ』と叱られてしまう。夫婦が仲良くなるには、私はここにいないほうが良いと思った。私のせいで二人の仲が悪くなるのを観るのはイヤだった」と著者に心の内を打ち明ける。大人の価値観で一括りに「家出少女」とレッテルを貼ってしまうことで、遊び目的や大人への反抗心からの家出であるように感じられる。しかし、彼女の視点から考えると、他者を思う心や人と人の良好なつながりを求めるが故の結果が家出であったことが理解できる。こういった数々のエピソードを読み進める中で、子どもたちが抱えている不安や願いに触れ驚かされると同時に、私はある一つの思いに気づかされた。それは、私がかつて彼らと同じ年頃に考えていたことと現在の自分の姿とのズレである。「見た目で子どもを判断するような大人になるまい」「自分は子どもの気持ちがわかる教師になろう」と志していた自分が、本書を読んだ時に彼らの真意に触れて不覚にも驚愕してしまった。結局自分も子どもと対局的な大人になっていることを指摘されたように思えたのである。良かれと思いついて行っている日々の指導が、実は子どもたちを救うことになっていないとしたら、と考えると無力感に苛まれる。そんな私に一つの答えを与えてくれたのも本書である。著者は「学校にも、家庭にも、病院にも仲間はずれにされた自分の孤独を癒す場所がないことは、それ自体、犯罪の引き金になるでしょう。(中略)そこで、僕ら大人が仲間はずれにされて傷つけられている少年が相談を持ちかけたくなるほどの安心感を、大人である僕ら自身がどうやって提供できるのかをまず考えることでしょう。」と述べている。小手先の技術ではなく、望ましい大人の在り方自体を示してくれたこの言葉は、今後の私の道標になっていくだろう。

私は小説を読んでいる時に、その情景によって色を感じることがある。本書はもちろん小説ではないが、教育書としては珍しくある色が浮かんできた。本書の色は紅だ。生きづらい現代を、もがきながら生き抜こうとして

いる子どもたちの脈打つ生命を感じたからかも知れない。色々な立場の大人が本書に触れ、一人でも多くの子どもたちに安心感を与えられる存在になっていくことを切に願う。私も子どもたちと共に今日を生き抜き、明日の紅に染まった希望の朝日を感じたい。